

時の觀念とエントロピー並びにプロバビリテイ

寺田寅彦

時の觀念に関しては、哲學者の側でいろいろ昔から六かしい議論があつたようである。自分はそれらの諸説について詳しく調べてみる機会を得ないが、簡単な言葉でしかもそれ自身既に時の觀念を含んでいないような言葉で「時」に定義を下すつとつというような企ては大抵失敗に歸しているようである。「一様に流れる量」であるとか、「逸しつある拡がり」だとかいうのは、勿論時の定義でもなければ説明とも思われぬ。Si non rogas intelligo (考えるほど分らない) という方が至当のようである。時の前後の觀念はとにかく直感的なものであつて、なんらかの自然現象に関して方則を仮定する事なしに定義を下しうべき性質のものではないと思われる。

吾人が外界の事象を理解し系統化するための道具として、いわゆる認識の形式の一つとして「時」を見做す事には多くの科學者も異論はないであろうが、それだけでは「時」の觀念の内容については何事も説明されない。近頃ベルグソンが出て来て、カントや科學者の考えた「時」というものは「空間化された時」であつて「純な時」というものが外にあると考へ、彼のいわゆる形而上學の重要な出發点の一つとしているようである。それらの議論は六かしすぎて自分には呑込めないが、とにかくわれわれが力学や物理学で普通に用いる時の觀念は空間の觀念を擴張したものだといふ事は疑いもない事である。力学はつまり幾何學の擴張である。空間座標の外に時を入れれば運動學が成立し、これに質量を入れて經驗の結果を導入すれば力学が出来る。これらの數學的の式における時間 t が空間 xyz とほとんど同様に取扱われ得る事はミンコフスキーの四元空間 Wark の構成されるのを見ても分る事である。

このように時を空間化して取扱つたために得られる便利は多大なものであるが、しかし人間の直感する「時」の全部は t の符号に含まれていない。

ニユートンの考えたような、現象に無関係な「絶対的の時」はマツハによつて批評されたのみならず、ばんせん輓近相対性原理の研究とともに更に多くの変更を余儀なくされた。この原理の発展以来「時」の観念はよほど進化して来たが、それはやはり幾何学の「時」の範囲内での進歩である。

吾人の直感する「時」の観念に随伴して来る重大な要素は「不可逆」ということである。この要点は時を空間化するために往々閑却されるものである。空間の前後は観者の位置をか更えれば逆になるが、時間は一方にのみ向つて流れている。抽象的な数学から現実の自然界に移つてその現象を記載しようとする時には、空間化された時だけでは用の弁じない場合が起る。それはいわゆる不可逆現象の存在するため、熱力学第二方則の成立しているためである。この方則の設立、エントロピーの概念の導入という事が物理学の発達史上で如何に重大なものであつたかという事は種々の方面から論ずる事が出来ようが、ここで述べたいと思つるのは、空間化された「時」だけでは取扱う事の出来ぬ現象を記載するために最も便利な「時」の代用物を見出した事である。

もし仮に宇宙間にただ一つ、摩擦のない振子があつて、これを不老不死の仙人が見ている、そして根気よく振動を数えているとすればどうであろう。この仙人にとっては「時」の観念に相当するものはただ一つの輪のようなものであつて、振動を数える数は一でも二でも一万でも一千万でも異語同義に過ぎまい。シムよしやそれほど簡単な場合でなくとも、有限な個体の間に有限な関係があるだけの宇宙ならば、万象はいつかは昔時の状態そのままに復帰して、少なくとも吾人のいわゆる物理的世界が若返る事は可能である。このような世界の「時」では、未来の果は過去につな継がってしまうかもしれぬ。

吾人の宇宙を不可逆と感ずる事は、「時」を不可逆と感ずる事である。全エントロピーは時と共に増すと減ず

る事はないというのが事実であるとすれば、逆にエントロピーをもって「時」を代表させる事は出来ないであろうか。普通の「時」とエントロピーとの歩調が如何に一樣でないとしても、そこに一つの新しい「時」の觀念が成立し得るのではあるまいか。

エントロピーの概念自身には「時」が含まれなくてもよい。これが時と關聯して来るのは自然の經驗の結果である。われわれの普通日常用いる時計の針の廻る角度がたまたま時の代用となるのもやはり自然の經驗に外ならぬ。少なくともこの点においては、時計の「時」とエントロピーの「時」とは対等のものである。

今もここに宇宙のエントロピーの量を指示する時計があると想像する。この時計の示す時刻は何を示すかといえ、それは宇宙の老衰の程度を示すものである。エネルギーの全量是不変でも、それはこの時計の進むにつれて墜落し廢類して行く。この時計ほど適切に不可逆な時の進みを示すものはないのであろう。しかし實際このような時計があつたとしても、それが吾人の日常普通の目的に適當したものでないかもしれぬ。第一に種々の個体の集團から出来た一つの系を考える時、その個体各個のエントロピーの時計の歩調は必ずしも系全体のものの歩調と一致しない。従つて個体相互の間で「同時」という事がよほど複雑な非常識的なものになつてしまふ。しかしそこにまたこの時計の妙味もあるのである。譬喩を引けば浦島太郎が竜宮の一年はこの世界の十年に当たるといふような空想や、五十年の人生を刹那に縮めて嘗め尽すといふような言葉の意味を、つまり「このエントロピーの時計で測つた時の経過と普通の時計と比べて一年と十年また五十年と一瞬とにたる」と説明すればよいかもしれぬ。これはただ通俗的な譬喩に過ぎないが、とにかく心理的に感ずる時の長短が人間自身ならびに周囲の物質的エントロピーの増加の多少と、幾分か相応じるように見えるのは興味のある事である。冬眠の状態にある蛙が半年の間に増大させるエントロピーの量は、覚醒期間のそれに比べて著しく少ないに相違ない。

次にエントロピーは一つの系全体にわたる積分として与えられる性質のものであつて、それが指定されても系を

組織する各個体の現状は指定されない。これはこの時計の不便な点であつて同時にすぐれた点である。ガス体の分子やエレクトロンの集団あるいは光束の集合場において各個部分の状態を論ぜんとしても、普通の「時」を使う力学は役に立たなくなる場合がある。そういう場合にこのエントロピーの有難味ありがたみが始めて明白になって来るのである。

かように、エントロピーの役に立つ場合には、必ずそこにいわゆる「分子的に混乱した (molekular ungeordnet) 系」がある。分子やエレクトロンの数が有限である間はエントロピーは問題にならず、変化は単義的で可逆であるが、これが無限になつて力学が無能となる時に、始めてエントロピーが出て来る。ボルツマンがこのような混乱系の内部の排置プロバビリテイの公算をエントロピーと結びつけたのは非常な卓見で物理学史上の大偉業であつた。プランクは更にこれを無限な光束の集団に拡張して有名な輻射ふくしゃの方則を得たのは第二の進歩であつた。すなわち系の複雑さが完全に複雑になれば統計という事が成り立ち、公算というものが数量的に確定したものになる。そして系の変化はその状態の公算の大なる方へ大なる方へと進むという事が、すなわちエントロピーの増大という事と同義になるのである。

「時」の不可逆という事にもまた分子的混乱系の存在が随伴している。前に挙げたような、仙人と振子とだけの簡単な世界では、可逆な「時」が可能であるが、吾人の宇宙はある意味で分子的混乱系である。ある学者の考えているように森羅万象しんらばんじょうをことごとく有限な方程式に盛つて、あらゆる抽象前提なしに現象を確実に予言することは不可能であつて、その故にこそ公算論の成立する余地が存している。そのために吾人の「時」には不可逆の觀念が伴つて来る。そのために未来と過去の差別が生じるのではあるまいか。未来に関して吾人の云い得る事は系の公算の増すという事だけではあるまいか。未来は「であろう」で、すなわちプロバビリテイのみである。この宇宙系のプロバビリテイの流れはすなわちエントロピーの流れで、すなわち吾人の直感する不可逆な時の流れではあるまいか。エントロピーに随伴して来る觀念は「温度」である。たとえば簡単な完全ガス体の系では容積を保定しておけば、エネルギーの増す時にそのエントロピーの増加は「温度」に反比例する。前のような通俗的たふえの譬を引けば、人間の

エントロピーの増大と「精神的の時」の進みが伴うと仮定すれば、また一定の物理的エネルギーを与えられた時にその人の「時」の進み方はその人の感覚の鋭鈍によるものと仮定すれば、この場合の「温度」に相当するものは、すなわちその鋭鈍を計る尺度の読み取りに当たるものである。尤もこれはただ譬喩に過ぎない。物理学上の言葉の濫用かもしれない。しかし真面目な物理学上の事柄でエントロピーや温度の考えを拡張して行く余地は充分にあるように思われる。すなわちどこでも *molekular ungeordnet* の状態が入り込んで来るところには、これらの觀念の幅を利用する余地がある。例えば液体の運動でもいわゆる混乱運動 (*turbulent motion*) を論ずる時にはオスボルン・レーノルズが行なったような特殊な取扱いが必要になって来る。ここにも、エントロピーや温度の觀念の拡張されるべき余地があるのではあるまいか。これに類した問題は液体の交流に関するものである。

現今物理学の研究問題は、分子、原子、エレクトロン、エネルギー素量となって、至る処に混乱系が跳梁している。プロバビリティの問題、エントロピーの時計の用途は存外に広いという事を思い出すに格好な時機ではあるまいか。時。エントロピー。プロバビリティ。この三つは三つ巴のように継がった謎の三位一体である。この謎の解かれる未来は予期し難いが、これを解かんと勉めるのもあながち無駄な事ではあるまい。

(大正六年一月『理学会』)

- 『寺田寅彦全集』第二卷(岩波書店、一九九八年)所収。
- 読みやすさのために、適宜振り仮名をつけた。
- PDF化には L^AT_EX 2_ε でタイプセットを行い、dvipdfmx を使用した。

<http://fomalhaut.web.infoseek.co.jp/sciencelib.html>

「科学図書館」に新しく収録した文献の案内、その他「科学図書館」に関する意見などは、「科学図書館掲示板」

<http://6325.teacup.com/munehiroumeda/bbs>

を御覧いただくか、書き込みください。